

井伏鱒二全集

第二卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第二卷

昭和四十二年三月二十日發行

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 竹之内靜雄

發 行 所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京〇七六五一(代表)

振替東京四一二三

印刷 株式會社 精興社
製本 和田製本工業株式會社

目 次

集金旅行	三
ジョン萬次郎漂流記	六七
ミツギモノ	一四七
琵琶塚	一六一
湯島風俗	一七一
岩田君のクロ	一九二
「槌ツァ」と「九郎治ツァン」は喧嘩して	二〇二
私は用語について煩悶すること	二〇三
中島の柿の木	二二一
山を見て老人の語る	二二六
多甚古村	二三六
多甚古村補遺	三四四
お濠に關する話	三八九
川井騒動	四〇八

鸚 鵡 四二三

掛 持 ち 四二七

へんろう宿 四四四

圓心の行狀 四五二

おこまさん 四五九

解 題 五二

井伏鱒二全集

第二卷

集金旅行

はじめ私は將棋の手ほどきをしてもらつた關係から、荻窪の望岳莊といふアパートの主人と昵懇ぢつこんにしてゐたところ、主人の女房がこのアパートで「三番さん」と通稱されてゐた三號室の止宿人といつしよに逐電した。爾來、望岳莊の主人は將棋にばかり夢中になつて、對局中に情勢がよくなつて王手飛車をしたときなど、きつと美人の後妻を見つけると問はず語りに言ふのが彼の口癖になつた。しかしいよいよ後妻を見つけようといふ段になると、彼は急性肺炎でぼつくりなくなつた。あとには勇太といふ小學校一年の男の子がたつた一人とりのこされ、おとむらひに行つてみても、勇太は受附の三疊間で炊事女を相手にコリントゲームなどに夢中になつてゐて、全く他愛なかつたのである。受附の次の部屋には町内の荻窪ロッヂのおかみさんや香蘭堂文房具店の主人など、窓のところにしよんぼり坐つて番茶をのんでゐた。

おとむらひがすんだ翌日、勇太は腕に喪章のついた小學生の服を着て、望岳莊の「五番さん」といふ新聞記者と「七番さん」といふたいへん美人ではあるが中年の獨身婦人に連れられて、私のうちにやつて來た。

勇太は叱られるのではないかと思つてゐたものと見え、五番さんの傍らに寄り添ふ恰好で行儀よく坐り、いざといへばいつでも泣きだしかねない顔色であつた。そこで五番さんが四角張つていふところによると、實はこのたび望岳莊主人の不幸については後始末で弱りぬいてゐるといふのであつた。最早、望岳莊の建物も抵當に入れてあるし地代は一箇年分も滞つてゐて、勇太を引取つてくれさうな身寄の人は一人もない。故人の原籍地に死亡通知を打電したにもかかはらず、いまだに誰も駈けつけて来る様子もない。村役場から「ゴセイキョライタム」といふ弔電が届いたにすぎない有様である。ついては、この勇太の身の振りがたについて、この際おたがひに故人との馴染み甲斐から妙案をうかがひに参上したと五番さんは私に相談をもちかけた。けれど私にも妙案があるわけではなく漫然と歎息して勇太を見てゐると、この子供の睫毛にもいつぱい涙がたまつて來た。さういふ工合に泣きだしさうにしてゐる子供の顔は、眞劍味があふれて多く可憐なのである。

五番さんはハンケチで勇太の涙を拭いてやつて、かねて用意してゐたのかポケットから紙煙硝をとり出して勇太に呉れてやつた。五番さんも私も同じやうな考へで、勇太の身寄があるなしにかかはらず、引取人が出て来るまで勇太に不自由させたくないといふ意見であつた。しかし、引取人が出てくるまでは故人の所持品を始末するわけにも行かないだらう。五番さんの提案によつて、私たちは望岳莊の部屋代を踏みたふして逃げた人たちから勘定を催促しようといふ計畫をたてた。もちろん、勘定を踏みたふして逃げて行つた人たちの荷物や夜具類は、望岳莊アパートの洗面所の横手の物置部屋にすつかり保存されてゐる。夜具蒲團・机・テーブル・椅子・電氣スタンド・掛軸・額ぶち・行李・トランク・火鉢・ギタ・オルガン・麻雀道具、

その他こまごましたものがいろいろしまつてある。六年前に故人が望岳莊を開業して、その間に部屋代未納のまま逃げ出した人が想像以上の数であることも納得できるだらう。未納者の原籍地を帳簿で調べそれぞれ督促狀を出してみても、それでも送つてよきなければ、私たちは遺留品を處分しようといふことにした。五番さんは故人の臨終に立ち會つたさうであるが、なにしろ望岳莊主人は逐電した細君の悪口ばかり言ひながら息を引きとつたので、後始末のことを言ふ暇がなかつたとのことである。このことについて五番さんは、いつしよに連れて來た七番さんに愚痴をこぼした。

「臨終のとき、あなたがそばで氷嚢をとりかへたりなんかしてゐたから、故人は後始末のことをいふ餘地がなかつたんですね。年増をんながそばにゐると、故人はきつと逃げた細君の悪口をいふ癖があつた。」

「お生憎さま。あたし、これでもまだ若いつもりですわよ。」

七番さんが半ば冗談に立腹してみせると、五番さんも堅苦しい氣持から解放された様子であつた。

「失禮。年増をんなでなくて美人といひなほしませう。とにかく故人は、美人を見ると必ず衝動的に細君の悪口をいひましたね。それから、お湯からあがつて一ぷくするときに、王手飛車をしたときでしたね。」

しかし勇太が、僕もう歸りたいと言ひ出したので、五番さんも七番さんも近日中に結果を報告するから何分よろしく頼むといひのこして歸つて行つた。彼等が玄關さきに出て行つたとき、勇太は靴脱石の上に紙煙硝の一きれを置き、五番さんが止せ止せといつてとめるのに石ころを拾つて來て、一發どがんと音をさせた。ところが直ぐにその子供は涙ぐみ、ふしようぶしよう私にお辭儀をして玄關を出て行つた。おそらく、どがんと鳴つた物音を私が大きな音だと讀めてやらなかつたのが、この子供には不満であつたのだらう。

初七日に望岳莊に行つてみると、五番さんが受附の次の部屋で町内の香蘭堂の主人と押問答してゐるところであつた。香蘭堂は以前からこのアパートの敷地を持つてゐる地主でもあり、建物を抵當にとつて故人に金子を用立ててゐる。彼は強硬に談じてゐるのであつた。

「さういふあなた御自身が、名實ともに借用證書の連帶責任者ぢやありませんか。御不幸があつてからこのかた見受けますところ、こちらさんには親戚が一つもないぢやございませんか。」

「つまり利息さへ拂へばいいのだらう。」

たぶん五番さんは私が味方に加はつたので氣を強くしたものと思はれる。

「おたがひ町内に住んでゐるのに、そんな因業いんごふなことを言はないでもいいだらう。」

さういふ劍幕で、五番さんは香蘭堂の主人を追ひかへさうと意氣込んでゐたが、香蘭堂も相當したたかものであつた。

「因業とは、これは意外ですね。ただ私は責任の行方といふことについて、御相談してゐるだけでございます。」

「いづれ拂ふことは拂ふ。拂ふといつたら拂ふ。」

「もちろん、拂つていただきさへすればよろしいわけですがね。」

私は目くばせで五番さんを部屋のそとに連れ出して、五號室に行つて後始末の経過をたづねてみた。部屋代未納のまま逃げて行つた人は六年間に十七人の數にのぼつてゐるといふことである。そのため未收金三千九百四十四圓、このほか別に立替金七十圓すつぽかされたのが一口あるといふ。この一口は、逃げた細君の

男に用立てた金子である。望岳莊の經營方針がスマートなる家庭的待遇といふのであつたため、かういふ結果になつたのかもしれない。五番さんが各未納者の原籍地にあて、このアパートの窮狀を訴へて支拂をうながしたにもかかはらず、十七人のうちお詫びの返事と弔狀をかねて返事をよしたのは一箇月分滞納の三名だけで、清く爲替で支拂つてくれたのは二箇月分滞納者一名と一箇月分滞納者一名にすぎなかつた。アパート住みの學生たちは休暇で地方に歸つてゐる際でもあり、支拂ひするには好都合のときだらうと思はれるのに成績が芳しく^{かんば}なさすぎるのである。五番さんは初めから憤慨しつづけて、これは田舎が不景氣だとか景氣がいいとかの問題でなしに、このアパートの窮狀を見すてるか見すてないかの人道上的問題であるといきまいた。そして私に、その厚意があるなら地方に出かけて行つて、滞納者たちから容赦なく未收金をとりたててくれないかと五番さんは私に懇願した。出かけて行つて相手が留守でも留守でなくても家族の人に用件を述べ、支拂つてくれないければ香蘭堂主人そつくりの口をきけばいいだらうといふのである。故人に對する心づくしとして自分の腹を痛めないで用を足すといふこの方法は、いささか責任のがれの感じであるが、私は集金に出かけてもさしつかへないと思つた。

「どうです、行つてくださいますか。」

さういつて五番さんは外國人のやうに私の手をつかみ、手を強くにぎりしめた。そんなに劇的に興奮してくれても、私がうまく集金できなければ五番さんもがっかりするだらう。私は旅行に出たいと思つてゐた矢さきなので、旅費自辨で出かけると言つた。

「行つてくれますか。有難い。それでは四箇月以上滞納の大ものだけで結構です。」

彼は手帳をとり出して、滞納者たちの名前とその職業や原籍地のノートを見せてくれた。四箇月以上の滞納者は幸ひ地方の都會から遠くない土地の出身者が多かつたやうで、集金に出かけるには都合がよさうであつた。大ものの滞納者は、主として關西方面の人に多く見受けられ、岐阜の市内に一人、神戸市の郊外に一人、岡山の郡部地方に二人、福山市の北部地方に一人、尾道市に一人、山口縣の岩國町に一人、福岡市の郊外に一人、それから、北海道の札幌に一人といふ率で分布してゐた。およその見積りから、私は先づ東京に一ばん近い岐阜を振出しに集金して行く旅程がいいだらうと考へた。しかし五番さんのいふところによると、自信をもつて福岡まで直行して、そこで一仕事してから後がへりするのがいいだらうといふのである。なぜかといふに五番さんの表現によると、旅費の心配といふ點から云つても「背水の陣」をしかなくては度胸が出ないだらうといふのであつた。私たちは日本地圖を見て銚衡した擧句、その中庸をとつて岩國町を振出しに活躍することにした。そして私がノートの滞納者の名簿を抜き書きしてゐると、ドアをノックして七番さんが酸漿はづきを鳴らしながらやつて來た。

「香蘭堂は歸つちやひましたわ。帽子を目ぶかにかぶつて、玄關の戸をばたんと閉めて出て行きました。」

氣をきかして報告してくれたのである。彼女は湯あがりの女性の特有とするセンチメントのある句をさせ、その句と酸漿を嚙みならす音の調和を彼女自身たのしんでゐるかと思はれた。たとへば山梔くもなの木をのそばを通るとき、私はかういふ句を嗅いだことがある。彼女は卓上に肘をついて私の抜き書きしてゐる名簿をのぞきこみ、

「おやおや、また名簿ですのね。よく丹精がつづきますこと。」

さういふ無精らしいことを言つたのである。そして五番さんが、岩國町の名物で食べものの名物は何だらうと私にたづねると、いきなり彼女が横合から磊落に笑ひ出して、

「岩國の名物は、鮎・織物・紙・酒の瓶詰。」

淀みなく言ふのである。学校の地理で覚えてゐるのかと思つてゐると、岩國には彼女の古い戀人がゐたといふことで、鮎・反物・紙・酒の瓶詰など、以前お土産にもらつたことがあるといふ。またこの町には彼女の悪い戀人もゐるといふのである。こんな艶聞をきかされる場合、私たちは勝手にしろと半疊を入れるのが常識である。さうして、その戀人に何かことづけがあれば傳へてやらうなどと冗談口をたたくのである。ところがその常識通りの冗談を私が言つてゐると、彼女は口のなかの酸漿を窓のそとに吐き出して、發作的に表情が氣色ばんで來た。そして私がこのアパートの用件で岩國に行くのなら、彼女もいつしよに出かけて行つて悪い戀人から慰藉料を巻きあげて來ると珍しいことを言ひだした。彼女の言ひぶんによると、當然それは要求してもいい慰藉料であるが、彼女の思ふやうに萬事うまく行けばこのアパートを抵當から受け出して、勇太を援助してやつてもいいといふ。どうせ一度は出かけて行つて、せめて彼女の貧乏してゐるところだけでも見せてやりたいと思つてゐたのださうである。私はそれを反駁したりさまたげたりする必要はなかつたが、私の旅行の目的とそれとは種類がちがつてゐる。五番さんも彼女の納得をうながしたが、五番さんは必要以上に堅苦しくなつてゐたやうである。

「しかし、それはお止しになつたらどうです。あなたが是非とも行くと仰有るなら僕は妨害しませんが、それとこれとは問題の性質がちがひます。こちらは岩國の町だけではない、福岡にも、尾道といふ町にも、岡

山にも神戸にも、岐阜にも寄ることになつてゐます。時機を改めてお出かけになつたらどうでせう。」

彼女は寧ろとりすました顔をして、彼女も自然の成行きで堅苦しさうに主張した。

「さうですかしら。でも、さう仰有られるとあたくしも言ひたくなりますわ。あたしも、岩國だけでなく福岡にも尾道にも、大阪にも岡山にも岐阜にも古い戀人がゐます。この際、ひとまとめにみんなから慰藉料をもらつて來ることにいたしますわ。」

嘘かまことかそんな處々方々に顔なじみを持つてゐるといふ身の上に驚かされ、私は壓倒される思ひで黙つてゐた。五番さんも、おそらく私と同じ氣持から黙り込んでしまつた。

「僕は、是非ともお止しなさいといふのぢやありません。」

と言つただけである。彼女も言ひすぎたとすこしは氣がついたらしく、柱簷のところに立つて行き、一枚その唇をめくりながら獨りごとを言つた。

「四月九日、先負。十日は佛滅、十一日は大安。あたくし、十一日の出發にしようかしら。」
そんな獨りごとを言つてゐた。

十一日の午後三時、七番さんと私は特急で東京を發ち、明くる日の夜明けに廣島で乗りかへ午前八時ごろ岩國の町に着くことができた。しかし東京驛で汽車が出るのを待つてゐるとき、七番さんは彼女の名前を七番さんと呼んでもらつては旅さきで人ぎきが悪いから、コマツさんといつて呼んでくれと註文した。驛まで見送りに來てくれた五番さんは、今度からは彼もコマツさんといふことにしてもいいかしらと言ひながら、

手をさしのべて彼女に握手をもとめた。そして彼女の手を約三分間以上も握つたりさすつたりした。かういふ場合、ぎごちなく見せないやうにするためには、さりげなく四方山よもやまのことでもしやべりながら手を握りしめるのが最良の方法であらう。五番さんは私の顔をうかがつて、旅さきで宿屋の女中がドテラを出してくれるのがいいか西洋寢巻を出してくれるのがいいかとたづねたり、また旅行して暫くぶりに東京に歸ると風呂屋の番臺のおかみさんまで魅惑的に見えるのは、何故だか知つてゐるかと私に質問をあびせたりした。さういふ四方山の話に似た無駄口をききながら、五番さんは彼女の手に觸り、彼女は美容院で仕上げて來た頭髮を空いてゐる方の手で限なく觸つてみて、頭髮の恰好をさんざん氣にしてゐる様子であつた。

いよいよ汽車が出る段になると、またもや五番さんは汽車の窓に手をさしのべて彼女に握手をもとめた。「ではお大事に。」

今度はあつさり言つた。

汽車が品川驛をすぎ横濱に近づくまで、コマツさんは黙り込んで分別くさく物思ひにふけり、彼女は両手で恰も蟋蟀こはらぎでもつかんで大事さうに持つてゐるかのやうな手つきを持續してゐた。そして手のなかの蟋蟀はどうしたらいいか迷つてゐるらしい様子に見えてゐたが、横濱驛をすぎしてから初めて私に話しかけた。

「この手のなかにあるもの、何だかあててごらんさい。あてたら偉いわ。」

「昆蟲類ですか。」

「ちがひます。」

「それでは、櫻の花びら。」